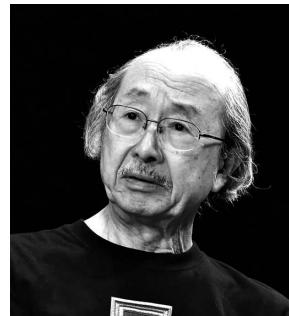


# 閑話休題

## 回顧：海を渡って“半世紀前の NY 赴任”①



西山 慈恩\*

コロナ禍でリモートワークが一般的となった。それらを支える IT 技術の進化のスピードは物凄く、現役を終え年金暮らしが 20 年を越えてきている者がそれにきっちりとついて行くのは面倒だ（というよりもう無理だというのが実態だろう）と言っていた仲間の訃報が届くことが多くなった。少子高齢化がのっぴきならぬ状態になってきているだけに、私を含むそんな世代はそろそろ人生を終えて良いのかとも思うが……

蟄居<sup>ちつきよ</sup>している為、過去のことに思いを馳せることが多くなっている。28 歳で NY に赴任した時ことを想い出せば、隔世の感がある。大学生になっている孫達に話せば、昔々の物語になるのだろうか。

60 年安保で騒がしかった大学を 1962 年（昭和 37 年）に卒業し、関西系の総合商社に入社した。

本社に集められて一か月の新人研修があった。商品知識から商売の流れ等多岐に亘ったが、その

中に、算盤の実技が含まれていた。私が配属された管理部門では算盤を使うことはなかったが、営業部門や経理部門ではそれを使うのが普通のことであった。今の業務からその姿を想像するとまるで漫画の世界だ。因みに Wikipedia で調べてみると、世界初のパーソナル電卓「カシオミニ」が発売されたのは 1972 年（昭和 47 年）となっている。

1964 年（昭和 39 年）には東海道新幹線が開業し<sup>たくま</sup>東京オリンピックが開催され、敗戦後の日本は逞しく成長していた。その流れに乗り、入社した会社は非繊維化を目指し貿易に力を入れ、急成長していた。

そんなことから、入社して丸 5 年にしかならなかつたのだが 1967 年（昭和 42 年）に、NY 赴任の辞令が出た。現地での与信取引の審査担当ということであった。「日本に居ながら米国の会社の信用判断が出来るわけがない。」と嘯いていたのがきっかけであったかもしれないが、大いに慌てた。社内に米国でのその業務に精通した先輩はい

\* 丸紅株式会社（定年退職） J.Nishiyama 連絡先 E-Mail アドレス : jion13381008nishiyama@gmail.com

なかったから、丸善に出向き、洋書の棚を漁った。「Credit and Collection」これだと思った。その本代がいくらであったかの記憶は薄れているが、給与が2万円強であったときに数千円であった筈だ。高いと思うも躊躇うことは出来なかつた。今思えば、会社の経費で購入出来るものだと思うが、“嘯いて”いたこともあるってやせ我慢したことから自腹であった。英語自体は難しいものではなかつたが、紙が立派なものであったこともあり厚さが3センチ近い本だったから、如何に頑張っても赴任時までに読了はかなわなかつた。渡航時の機内でも読まねばということで、当時は航空会社が呉れていた航空会社のロゴ入りの機内持ち込み用の航空バッグに忍ばせた。

海外への渡航が自由に出来る時代ではなかつた。まず米国への渡航VISAだが、E1というものであった。これは米国と通商条約を締結した国の国民が取得できるビザで、これは現在でも制度としてあるようで、ネットで調べてみると次のように解説されている。

“Eビザを取得できるのは、米国法人で、役員または管理職のポジションに就く方、あるいは、会社の商品、市場戦略、海外での企業運営等、その米国法人にとって不可欠で専門的な技能、技術、知識を持つ方、もしくは米国内で容易に見つからない知識を持つ方となります。”

このVISAを取る為に溜池の米国大使館に出かけて面接を受けた記憶があるが、上記したような、まだ新人と言えるような私にも出たのだから、形式的なものであったと思われる。

当時の海外向けの出発は羽田だけだった。航空機の進化から今はそれほど厳格でないと思うが、帯同する荷物の重量制限が当時はあった。預けるスーツケースと例の本を入れたことからかなりの重さとなった機内持ち込みのバッグを合わせてチェックインカウンターで計量した記憶がある。今なら機内で寛ぐ為に、Tシャツの上にカーデガン等という服装が多いが、スーツにキチットとネクタイをし、当然のことながらダークな革靴姿での搭乗であった。通関を済ませると今は免税品等を売る店などで賑やかな空間があるが当時は搭乗までの間の通路のようなところに、丸窓があり、それには蜂の巣のような穴の開いた音を通す部分

があり、そこで通関前に別れた者と最後の別れの言葉を交わすことが出来た。当時は家庭をもつても主幹者以外は最初の1年間はその帶同を会社が認めていなかつたから、私は結婚2年半弱であつた妻と最後の言葉を交わしたはずだ。それがどういうものであったか、万感の思いがありながら「じゃあな」位だったと思う。もちろん勿論Boarding Bridgeは未だ完備されてなく、建物を出て徒歩で搭乗機まで行きタラップを昇るというので、その最後のところは今でも見かけることがある。それは首相や海外の大統領等がそのような形で出発したり来日したりする姿である。要人がそのようにするのはセキュリティの関係から機体の近くまで車を用意するということと、タラップで手を振るという絵が必要なのかもしれないが、そんな絵を自分もしたなど、タラップから機内に入る前に何処にいるのかはわからなかつたが、見送りに来た妻や会社の同僚等に手を振ったことを思いだす。



日本の航空会社の太平洋線としてはJALがやつと米国西海岸のLAまで飛んでいた。使用していた機体はDC8でホノルルでの給油が必要であったから、米国入国の手続きはそこで行われた。生まれて初めての外国入りで、そこでのことが今は懐かしく思い出されるが、その時点では冷や汗ものだったことがある。

それは、荷物の検査で引っ掛けたことに始まる。預けていた大きなスーツケースを開けると検査官の動きが止まった。次に始まったのはキッカリと詰めていた物を台の上に広げ始めたことである。あっけにとられた私に検査官が言った言葉のすべては理解できなかつたが“smell”という言葉があった。確かに匂いが漂っていた。それは“正露丸”的匂いであった。

「水が変わるとお腹をこわすことがあるから」と母が差し入れてくれたものだった。

出発前夜に念のためということで何錠か飲んでいて、一度開封していたから大いに匂っていた。“This is a medicine for stomachache!”と返した筈だ。その後やりとりの詳細の記憶は途切れているが、それでなんとかなったのだろう。しかし、やりとりにかなりの時を要した筈で、次の記憶は、スーツケースを再パックして、再搭乗するゲートに向かうシャトルバスに乗り込むも一人であること。検査のブースは何列かあったから同乗の乗客は皆検査を済ませて先発のバスで既に移動していたのである。心細い気持ちになるもその時点ではまだ余裕があった。しかしバスを降りてゲートに向かうも、そこに誰もいないのを見て慌てた。

「乗り損ねたらどうなる……」鼓動が激しくなった。ポケットに入っていた搭乗券のフライト番号を確認し、掲示板のゲート番号を再確認する。「間違いはない、しかし乗客が居ない！」ゲートに航空会社の職員も乗客らしき人もいないのだから確認のしようがなかった。しかしフライトの発時刻までには1時間をゆうに超える余裕があった。同じ番号のゲートが他にある筈はなかったが、念のためガランとしていた建物内を巡ってみた。当時は今のような観光客が居なかつたのである。再度当該ゲート番号の待合室に戻るが、やはり無人であった。覚悟を決めて、待つことにし、例の洋書を取り出して読もうとするが、字面を追うだけで、内容が頭に入っては来なかつた。時間の経つのがやけに遅かった。洋書から顔を上げ何度も見渡した。小一時間も経った頃だったと思う頃、航空会社の職員と思われる女性が現れ、ほどなくぞろぞろと羽田から一緒であった人々が現れた。その中の一人に質したところ、JALのラウンジで寛いでいたとのこと。なんのことではない、JALがサービスの一環として己のラウンジに案内していたのである。その時は、「本物のオレンジジュースの美味しかったこと」と言わされたことに、口惜しさがあったが、「乗り損ねる」ことがないことになつた安堵感が強かつた。

今思えば、荷物を預けた乗客が乗つてこないとなれば、安全上の観点からその原因を突き止めるまでは飛行機を飛ばすわけにはゆかないわけで、航空会社がその乗客を探し回るだろう等ということは、生まれて初めての国際便への搭乗という中

では思いも及ばなかつたのである。

ホノルルを発ちLAに向かう機内では急速に眠気に襲われた。ホノルルでの緊張感からの解放感があつたのだろう。着陸が近いという機内の案内で目を覚まし、窓から見えたものは雲の上から頂を見せた山だった。シエラ・ネヴァダ山脈の南端に位置する米本土最高峰4418mのホイットニー山。それに見入っているうちに機体は右旋回し着陸態勢に入った。下に見えたのは緑の中にオレンジ色の屋根とプールのある邸宅の連なりであった。ビヴァリー・ヒルやハリウッドが見えたのだと思う。

当時、日本からNYまでの直行便はなかつた。LAからは国内線に乗り継がねばならなかつたこともあり、赴任するNYに本社を置く会社の支店がそこにあつたから立ち寄つた。立ち寄つたと言えば旅慣れたようだが、生まれて初めての外国の地に足を踏み入れるにつき、迎えに来てもらったということが正しいだろう。日本を発つ前に電報で連絡していた。当時の海外との連絡は、基本的に航空郵便、急ぐものは電報で、電話は料金がべらぼうに高いだけでなく申し込んで回線が空くのを待つというものであった。電報もローマ字表記していたが、料金節約の為、文面を短くする略語を造っていた。すっかり忘れてしまつてゐるので、実例は示せないが、どんなものかと、敢えて今作つてみると、(NYUUSATSU／入札)を(NST)というように短縮するものであり、会社内に短縮語の辞書のようなものがあつた。今の若者たちが、スマホで粹がって使う言葉に追いつけない世代が、卑屈になることは何もない、そもそもはずつと前にそれをやつていたのだ。

支店に連絡した電報で記した名前の「慈恩」は「JION」であったから、受け取つた支店内で「二世でないか？英語もできるだろう、迎えは不要では……」という話もあつたと迎えに来た先輩に聞かされた。そのように対応されていたら、空港でうろうろしたことだろう。顔写真の電送ということもなかつたから、到着の私をどのようにして見つけたのか、今でもそのようなときに見かけることのある名前を書いた紙をロビーで提示していたのだろうか、その記憶はない。

【次号へつづく】